

札幌くらぶ

72

【編集・発行/札幌くらぶ】 064-0931 札幌市中央区中島公園1-15 札幌交響楽団事務局気付
メール: information@sakkyoclub.net
ホームページ: http://sakkyoclub.net/sakkyoclub/

2015. 10



第11回札幌くらぶサロン

フルート野津さんのミニコンサート開催!

第11回札幌くらぶサロンが9月12日(土)に北区のノースエイムで開催され36名が参加。

第1部は札幌定期演奏会後半の聴きどころ。札幌アーカイブでムソルグスキー作曲ラヴェル編曲の「展覧会の絵」、ラヴェル作曲「マ・メール・ロア」、それらを聴きながら八木先生の編曲とオーケストラレシジョンについて掘り下げた解説を進めていただきました。映画のキャストイングを考えるのと同じように楽器の選択を考える面白さと難しさについて作曲家の観点からの興味深いお話でした。同曲が演奏される2016年1月の定期演奏会が今から楽しみです。

第2部はアンケート結果で一番要望が多かったミニコンサート。今回は札幌フルート副首席奏者の野津雄太さん、ピアノ伴奏は伊藤



札幌アーカイブ担当の八木幸三さん



ミニコンサートでの野津雄太さん(フルート)と伊藤庸子さん(ピアノ)

庸子さんです。まずフレンチスタイルについてのお話があり、サロンサーサンスの「ロマンス」作品37、バッハの「ソナタ ト短調」BWV1020が演奏されました。その後、ベーム式フルートが完成されて音量や奏法などがどう変わっていったのかなどのお話があり、T・ベーム「エレジー」作品47、最後にF・ボロン「カルメンファンタジー」そしてアンコールにビゼー「アルルの女」よりメヌエツトが演奏されました。拍手がいつまでも鳴りやまない、リサイタルのようなミニコンサートでした。

第3部は交流パーティー。八木さん、野津さんと伊藤さんの周りにはたくさんの方が集まり大変盛り上がりしました。演奏家のお二



札幌くらぶサロンで編曲をテーマに「展覧会の絵」から第4曲の「ピドロ」が選ばれました。一般的な解説では、「大きな車輪のついた牛車をひく牛」となっています。

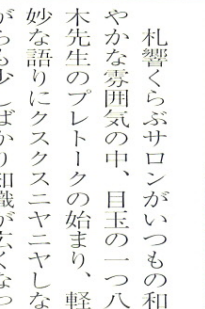
稲村靖彦 「展覧会の絵」に思う



盛り上がった交流パーティー

人は二次会にもご参加いただき夜遅くまで音楽談義、至福の時間。(事務局次長 上野文博)

札幌くらぶサロンがいつもの和やかな雰囲気の中、目玉の一つ八木先生のプレトークの始まり、軽妙な語り口がクスクスニヤニヤしながらも少しばかり知識が広がった感じがしました。サロンのもう一つの目玉は生演奏、目の前で聴く楽器の音、息遣い指遣い様子は広いホールでのコンサートでは味わえない体験でしょう。プレイヤーの方のト



木立憲吾 サロンの二つの目玉

私は以前からこの解説に疑問を感じていました。この疑問に答えられたのがNHKのテレビで放映された番組で、作曲家の団伊玖磨さんが曲の基となったハルトマンの絵を探しに行くとの内容でした。「ピドロ」の題の絵は不明でしたが、芸芸員が示したのは「殺されて木に吊るされた人達」の絵でした。「ピドロ」という言葉は今でも使われ「虐げられた者」の意味だそう。作曲家はこの絵を見て権力者に対する激しい「怒り」と虐げられた者への「哀れみ」を曲に込めたのではないのでしょうか? 皆様はどう感じますか?

伴奏の伊藤庸子さんのピアノの響が美しく、心から楽しませて頂きました。帰りの地下鉄の駅へ向いながら、もう次のサロンを待ち望んでいる私がありました。

札幌くらぶのサロンに参加するようになってまだ日の浅い私ですが、こんなに待ち遠しい集いは経験したことはありません。そこでは八木幸三先生が演奏会の「プレトーク」として、曲の解説や作曲家にまつわるお話を詳しく、難しい理論をより易しく実際の音を交えて、御講義なさいます。しかもウィットに富んだお話は心から楽しむことが出来ます。何だか私の耳も肥えささそうなのです。そのあと、ミニコンサートでフルートの美しい調べに酔わせて頂きました。奏者の野津雄太さんのお話も軽妙で心が弾みました。

熊澤静子 心おどる会



熊澤静子 心おどる会

クも個性があり大変楽しいひとときを過ごさせていただきました。今回は又どの様なオチが飛び出すのかワクワクドキドキ、来たる日が待ち遠しく、これからも皆勤を目指して通学? したいと思っています。

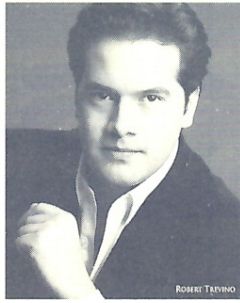
11月・1月の定期・名曲シリーズ演奏会 演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三 (札幌くらぶ会員)

森の響フレンドコンサート

札幌名曲シリーズ

「ローマ! ローマ!の日曜日」
11月8日(日) 14:00
札幌コンサートホール大ホール
指揮/ロベルト・トレヴィーン
ヴァイオリン/南 紫音



ロベルト・トレヴィーン ©Lisa Hancock



南 紫音 ©Shuichi Tsunoda

ベルリオーズ

序曲「ローマの謝肉祭」

「ベルリオーズの作品を十曲上げれ」と言われると、意外に数が伸びない。「幻想交響曲」は別格として彼の作品は意外と知られていない。彼は劇音楽や歌劇もいくつか残しているが、序曲「ローマの謝

肉祭」は、歌劇「ベンヴェヌスト・チエリリーニ」の第二幕のための序曲として1844年に作曲された。普通、序曲と言うと第一幕がはじまる前に演奏され、各幕間には、前奏曲か間奏曲が演奏されるのだが、ロマン派作曲家ベルリオーズは、第二幕の前に大きな序曲を置くという大胆な試みをした。さらにこの序曲は大変に優れており、やがて独立した序曲として「ローマの謝肉祭」と呼ばれるようになった。彼は6曲の序曲を残したが、この曲が最も有名になっている。曲は、オペラの素材を巧みに用いて、イタリア民俗舞踊サルタレッコにより熱狂的な盛り上がりを見せる。

■マズネ/タイスの瞑想曲

このオペラは、古代キリスト教の修道士が享楽の女性タイスを救おうとして改宗させながら、自身はかえってタイスの肉体の美しさに魅惑されて墮落していくという内容。この第二幕に奏でられる「瞑想曲」はヴァイオリンのコンサートでもよく演奏される名曲である。

■サラサーテ/カルメン幻想曲

ご存じ魔性の女カルメンと彼女を愛しすぎてしまったドン・ホセ

の悲劇を描いたこのオペラは、作曲過程でその内容から劇場側とトラブルが続き難産の末完成された。しかし、型破りで画期的なこの作品は、その迫真のリアリズムが後のヴェリスマ・オペラに強い影響を与え、不滅の名作として万人に親しまれている。このオペラの旋律を用いたバラフレーズ作品は数多いが、「カルメン幻想曲」は、ヴァイオリンの名手サラサーテらしく管弦楽を背景に独奏ヴァイオリンが超絶技巧を披露する作品として有名だ。序奏と4つの部分からなるが、重音奏法、グリッサンド、フラジオレット、ピッツィカートなどなどヴァイオリンの様々な技巧がいたるところで楽しめる。

■ヴェルディ/「椿姫」前奏曲、バレー音楽

「アイーダ」より凱旋進行曲とワグナーと同じ年に生まれたヴェルディは生涯に30に迫るオペラ作品を書き、「椿姫」や「リゴレット」などヒット作品を次々に生んだ。中でも「アイーダ」はスペクタクル作品として、中学校の音楽でも永らく取り入れられている。第二幕第二場は、このオペラの主

要登場人物がすべてそろう、ア

イーダが慕うラダメス隊長に率いられ、勝利したエジプト軍が堂々と行進することで特に有名だ。この時演奏される凱旋進行曲は、オペラではエジプトトランペットという特殊な楽器が使われる。今回は、この勇壮な旋律を東海大学第四高等学校吹奏楽部が加わり演奏してくれるのも楽しみだ。

■レスピーギ

交響詩「ローマの泉」

レスピーギは、その時代にあつては比較的伝統的な書法で作品を書いているが、その精緻なオーケストレーションは、彼の詩的な感性と相まってこの傑作を生み出した。

3部作の最初の曲である「ローマの泉」は、初演が不評だったが、トスカニーニが再演して大好評を得た。指揮者によって作品も変わる好例だ。作曲者がローマを訪れて見た4つの噴水の情景から、幻想的な音楽がつけられている。

「ローマの松」は「ジャニコロの松」でナイチンゲールのさえずりが以前の札幌演奏では、キタラの後方から聞こえたが今回は、前半ではクラリネット独奏が幻想的な世界を創出する。「アッピア街道の松」は、大軍の列が遠くから徐々に近づいてくるような迫力ある盛り上がりで、映画「ベンハー」をついイメージしてしまう。

第583回札幌定期演奏会

11月27日(金) 19:00
11月28日(土) 14:00
札幌コンサートホール大ホール
指揮/ウラディーミル・アシケナージ
ナージ
ピアノ/河村 尚子



ウラディーミル・アシケナージ ©Keith Saunders



河村 尚子 ©居坂浩文

■ベートーヴェン/バレー「プロメテウスの創造物」序曲

「ベートーヴェンが、バレー音楽なんて作曲していたのかわか」と思われる方も多いのではないか。彼は、生涯で2曲のバレー音楽を書いた。はじめに書かれた作品は、ボン在住時代にフライベートの依頼された10分ほどの作品で、交響曲第一番が完成した直後の1800年につくられたこの作品は、イタリア出身の振付師サルヴァ

トーレ・ヴィーガンと組んだ本格

的なものだ。今では、バレーを伴った全曲が演奏されることはなかなかないが、序曲は頻りに演奏されている。力強い総奏にはじまり壮麗な旋律による導入部とそれに続く主部は、快活な楽想が繰り広げられ実にベートーヴェン的だ。

■モーツァルト/ピアノ協奏曲第25番ハ長調K593

4歳のモーツァルトが、一生懸命ペンを走らせている五線紙にクラヴィア(後のピアノ)協奏曲が書かれていることを知った父レオポルドの驚きは如何ほどであったであろうか。モーツァルトの作品中、大きな幹となっているピアノ協奏曲は、ザルツブルグ時代の13曲とウィーン時代の17曲に大きく分けることができるが、特にウィーンで書かれた第14番変ホ長調から第27番変ロ長調までの14曲は、オリヴィエ・メシアンが「人類の奇蹟」と呼んだように音楽史上、最高峰の協奏曲であることは確かである。後半に書かれたこの第25番は、彼のピアノ協奏曲としての集大成的作品で、形式的にも内容的にも充実した作品となっている。独奏ピアノと管弦楽との緊張と融合が図られた、リトルネロ形式の協奏曲と古典派のソナタ様式が一体となった壮大な交響的協奏曲となっている。

■ショスタコーヴィチ

ショスタコーヴィチほど、政治

交響曲第10番短調

体制に影響された作曲家も珍しいのではない。彼の作曲活動は、当時のソビエトから大きな制約を受け、交響曲なども自分の本意を巧みにスコアに織りこみながら、まるで騙し絵のような表面的には社会主義リアリズムに迎合したような作品を書いている。周囲の期待を裏切ったような交響曲第9番により「ジダーノフ批判」にさらされ、その批判をかわすために書かれた「森の歌」の後、第9番から9年が過ぎた時期にこの曲は書かれた。しかも、スターリンの死の直後である。

厳しい統制の緩み、つまり「雪解け」という社会情勢の変化の中でこの曲は生まれたのだ。洒落な形式と諧謔的な第9番ではなく、この第10番こそが「戦争三部作」の真の完結編となるべきという意識が、作曲家にもあったらしい。

全体的には古典的な4楽章構成であり、1時間近くの大作なので第2楽章はたった5分弱のせせこましいアレグロ。この楽章は、作曲家が「音楽によるスターリンの肖像」と述べたと言われ、この曲全体が「スターリンの圧力から解放された自分」を描いているとも言われている。ただ、シヨスタコーヴィチがインタビュを受け、直接言ったことは「聴きたいように聴いて、解釈したいように解釈すればいい」という言葉であった。

第584回札幌定期演奏会

12月11日(金) 19:00
12月12日(土) 14:00
札幌コンサートホール大ホール
指揮/マックス・ボンマー
ピアノ/ゲルハルト・オピッツ



ゲルハルト・オピッツ

ベートーヴェン

ピアノ協奏曲第4番 短調

作曲家円熟期のいわゆる「傑作の森」の中で書かれたこの曲は、それまでの古典派音楽の協奏曲の様式や概念を超えたロマン派音楽の協奏曲を予告する特徴を持っている。まず、管弦楽はますます交響曲的になり、ピアノ独奏はオケに対峙し、さらに渾然一体となるようなピアノ独特の機能を十分に発揮させている。第1楽章冒頭で直ちにピアノが第1主題を提示するというこれまでにない画期的な開

始方法や第2楽章が終わると、そのまますぐに第3楽章に入っていくなど新しい試みが多くみられる。独創的な創意や工夫は、そのまま第5番「皇帝」にもつながっているのだ。

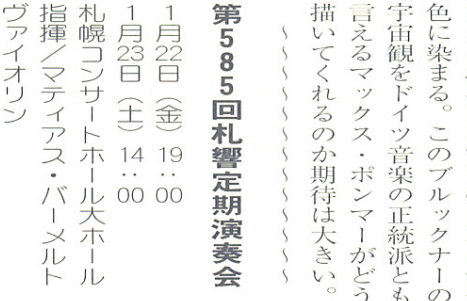
■ブルックナー/交響曲第4番 変ホ長調「ロマンティック」(ハイス版)

音楽評論家の吉田秀和が、ザルツブルグ音楽祭でクナッパッツブッシュの指揮によるブルックナーを聴き、途中で眠りこけ、目が覚めたら同じ音楽が鳴っていた、という話はある。確かにブルックナーの交響曲は、長大でしかも同じ旋律の繰り返しが多い。しかし、聴き慣れるとこれがグセになってしまう人も多いのではない。ブルックナー全11曲の交響曲の中でも「ロマンティック」は最も演奏されている名作だ。この交響曲も多分に漏れず幾度かの改訂がおこなわれているが、今回はもっとも多く演奏されるハイス版だ。第1稿から比べるとブルックナー動機を生かしたより洗練された構成美が感じられる。

この曲は、作曲家にとって初めての長調の交響曲である。変ホ長調という調は、とても人間的な温かみのある音の世界を創り出し、全調性の中でも明朗闊達と言った良い。そのためか、この曲を聴くと幸福感、さらには勝利の雄叫びのような高揚感を随所に感じさせてくれる。そんな調性を用いなが

第585回札幌定期演奏会

1月22日(金) 19:00
1月23日(土) 14:00
札幌コンサートホール大ホール
指揮/マティアス・バーメルト
ヴァイオリン



マティアス・バーメルト

ラウエル

組曲「マ・メール・ロフ」

絵本を子どもに読み聞かせるように、ラウエルはおとぎ話を音楽で読み聞かせたのがこの曲だ。本来は子どものためのピアノ連弾曲で、おとぎ話に基づく5つの小品を集めたもの。後に作曲家自身が「前奏曲」、「間奏曲」等を付け加えてバレエ曲として管弦楽化した。題名はフランス語で「マザール・グース」を意味している。ラウエルの豊かなオーケストレーションの響きは、幻想的でまるでディズニー映画の音楽のようだ。そう言えば、この曲には「眠りの森の美女」や「美女と野獣」も登場する。

■メンデルスゾーン

／ヴァイオリン協奏曲 短調

メンデルスゾーンは、二短調とホ短調のふたつのヴァイオリン協奏曲を残したが、後者がお馴染みの名曲である。メンデルスゾーンが28歳の時に着想し、その後6年の歳月をかけて完成させた。前作の二短調作品と同じく当時の名ヴァイオリニスト、エルディナント・グヴィッツの助言を受けながらつくられ、彼にこの曲は献呈されている。ロマンティズム溢れる甘美な旋律ではじまり、均整のとれた形式美でつくられた3つの楽章は、中断することなく演奏され、心地よい流動感を聴くものに与えてくれる。

■ムソルグスキー(ラウエル版)

ラウエル

この曲は、作曲家が親友であった画家の遺作展を訪れたときの印象がもとになって生まれた作品で、ピアノ独奏作品として一ヶ月足らずの短期間で1874年に書かれた。ムソルグスキーの生前中は演奏されなかった原曲が、リムスキー・コルサコフにより改訂されているが、1922年、原曲から半世紀を経てラウエルが編曲した版が最も良く演奏されるようになった。まるでリレーのようにこの作品は受け継がれ、また多くの作曲家が協奏曲やポピュラー曲などに編曲しているが、ムソルグスキーの原曲の魅力が形を変えても生き続けている証でもある。

作品は「プロムナード」から始まる。この主題をヴァイオリンで奏でる編曲もあるが、やはりラウエルの編曲によるトランペットの響きが何と言っても印象的。そして地底に住む小人の妖精「グノームス」や中世の古城をイメージさせる古風な「古城」、愛らしいカナリアの雛の姿を描いた「卵のからをつけたひなの踊り」、さらにはローマ時代の地下墓「カタコンブ」やロシアの民話に登場する妖怪「パーバヤーガ」など多彩な情景やキャラクターが豊かなオーケストレーションで描かれている。(写真協力/札幌交響楽団)

♪ 楽員さんに 興味津津！ ⑦ ♪

♪ ホルン副首席奏者 山田圭祐さんに聞く♪

♪ 僕のファーストはN響

ホルンは面白いです。中学校の吹奏楽部に入る時はサククスとかトロンボーンがいいなと思っていました。でも、人気の楽器はすぐ埋まってしまい、なんとなくホルンになりました。ホルンの事は何も知りませんでしたが、吹いてみたら音が比較的出て。マウスピースのサイズはそんなに違わないはずなのにトランペットは全然出ませんでした。ホルンとは相性が良かったのかもしれない。

顧問の先生がホルンで音大を出た方で、その先生からはたくさん先生の事を教えてもらいました。

一つはその先生にN響のコンサートに連れて行ってもらったことです。運動とラフマニノフのバガニニラプンディとリストのレ・プレリユード。指揮者は渡邊 正さん、ピアノが小菅優さん。全部覚えてピアノが小菅優さん。全部覚えています。行く前に演奏曲目をMDにダビングしてもらって何回も何回も聴いて行ったのを覚えてます。実は演奏自体はあんまり覚えていないのですが、演奏している姿はすごく鮮明に覚えています。それが中学3年生で、オーケストラを聴いたのはその時が初めてでした。そう考えるとキタラファーストコンサートってすごいことですね。

先生に教えてもらったもう一つのは、カラヤンとベルリン

♪ 大学は農工大です

先生には「音楽の道は大変だよ。山田君は勉強もできるんだから医者さんにもなって、将来は私の役に立ってね」なんて言われていた。高校は普通科に行きました。高校では吹奏楽の部活しかしていません。高3になってさうがに受験がやばいと。音大に行くという決断もできなかったし、理系が得意だったので普通の大学に行つて、ホルンはアマチュアで続けていこうかなと思いましたが、そこから1年間「ホルン断ち」をして東京農工大に進学しました。

フィルのCDです。曲はホルストの惑星。ホルンがかっこいいですよ。先生はこれ聴いて、ホルンがいいなと思って音大に行つたんだよ」というお話を聞いて、そのCDを何度も何度も繰り返し聴いたのを覚えています。

仲間には恵まれました。高校のホルンの人達がみんなすごく上手で、仲が良く、一緒にホルンの四重奏でアンサンブルコンクールに出たりしていたんです。大学生になってからもその4人で集まって、自主企画でホルン四重奏の演奏会もやりました。

大学のオケでも吹いていました。受験のために中断したホルンのレッスンにもまた通い始めました。大学では、終電まで練習して次の日は朝から授業、というすごい毎日でした。まあ、あれはあれでなかなかいい経験でしたね。

♪ いよいよ本腰を入れて

農工大を卒業して、桐朋のカレッジディプロマコースというところ2年間行きました。実技とあと2、3の授業を取れば修了できるコースです。でも、やろうと思えば色々な授業を取ることができたので、それはとても良かった。やっぱり音大に行つてからが一番伸びたかもしれないですね。本腰入れてやらなきゃ、という気持ちの問題かもしれないですが。

2年目の秋頃からはエキストラでいろんなオケに行かせていただきました。読響やN響、日フィルや名フィルにも行ったことがありますが。エキストラで呼ばれるようになったのはコンクールの成果もありませんが、人づてという知り合いが知り合いを呼んで、みたいな数珠つなぎですね。

留学も考えていたんですが、仕事が入ってくるようになったので

心の持ちようを大切にしたい



プロフィール

神奈川県出身。東京農工大卒業。桐朋学園大学音楽学部カレッジディプロマコース修了。桐朋オーケストラアカデミー修了。2011～2013年小澤征爾音楽塾オーケストラに参加。2013年秋吉台音楽コンクール第3位。2014年9月札幌交響楽団入団。2015年5月より副首席奏者。2015年日本管打楽器コンクール第3位。これまでにホルンを阿部磨、猶井正幸の両氏に、室内楽を白尾彰、鈴木良昭の両氏に師事。



中学3年生の文化祭で

混ざってみたり、アドリブのバトルがあったり、もう無茶苦茶いろいろやらされました。そこで色々吸取できたのも面白かったですね。普通にストリートで音大に行つてたら経験しなかったことなのかなと今は思います。

そんなこんなで4年生の時、ホルンの先生に「音大に行きます」とちゃんと行って、研究室の先生にも「すみません、ちよつと受験します」と言いました。

音楽の勉強をしながら卒論も書かなければいけないし、2月には締め切りが迫っていて、もうやばいと思い4日間くらい学校に泊まり込んで、ずっとパソコンとらめっこしていました。卒論のテーマは「多摩丘陵におけるオーブンバスFTIRを用いた大気計測」といつ、赤外線のスเปクトルで大気計測をしてみようという研究です。

「今行ったら、ちょっともつたいないな。もう少しエキストラとして経験を積むことができたらいな」と思って、富山のオーケストラアカデミーに2年間行くことにしました。

♪ 札幌の第一印象は真面目！

このアカデミーは半年に3回だけ演奏会があり、その前に1週間の拘束期間があるけれど、あとはもう自由に東京に帰ってもいいし富山に残って自主練習してもいいというところですよ。

アカデミー2年目の冬に、札幌のオーケストラを受けました。札幌も初めてだし、札幌の事も何もしりませんでした。普通は前日に入ってピアノと合わせるのですが、前日に日フィルの本番を引き受けていて、さらに翌日も仕事が入っていたので、やむを得ず日帰りでした。逆に変な緊張をしなかった。いい意味で聞き直れたのかなと今は思います。でも、その時は「ああ、もう終わった」と思っていたら空港で電話がかかってきて「ええっ！」と。実はどうしようかと悩みました。どんなオケか分らないし、遠い札幌で暮らすことにも不安があったのです。農工大時代のトレーナーの先生が旭川出身の方で札幌の事もよくご存じでした。ホルンの島方さんに話して下さって、何かあれば助けてくれる人達ばかりだからいいんじゃない？ ということで入る決心をしました。

札幌で最初に吹いたのはオーケストラの翌週、エキストラとしてでした。井上道義さんのちょっと変わった曲ばかりやった演奏会だったん



農工大の時、音楽教室の発表会で

なあと思った印象がありますね。それに皆さん優しくかった。最初の本番の舞台袖で、話す人もいなくて不安な気持ちで立っていた時にヴァイオリンの河邊さんが話しかけて下さったんです。僕、北海道に親戚もいないし、こっちに住んでいる友達もいないし、何も知らないところでしたから、そうやっていつも話しかけて下さる優しい方達ばかりで嬉しかったですね。

♪ 今は気持ちの移行期？

活動の幅を広げることよりも、今は自分の演奏に向き合いたい。今はいい意味でも悪い意味でも、いっぱいいいいっぱいなところがある。大学の時は2年ごとにステップアップしてきたので、札幌2年目の今年はまだ一段違うステージに行けたらなという思いがあります。プロになって本番をこなす回数が飛躍的に増え、本番をしている時の心境が昔とは違う気がするんです。もちろんプロになってお金をもらって演奏活動をしているわけだから責任も感じます。でも、それだけでなく、周りの音楽家の方達やメンバーが本当にすごいなあと日々強く感じるんです。だから今は、気持ちの移行期というか、

でもも表情がだいぶ違うので新鮮です。もともと植物が好きなので、関東とは植生が全然違うのが面白いですね。名前を調べて覚えたいなと思っています。違うといえば、自転車に乗っているんですが、太平洋側に住んでいた人間からすると南に行くこと山に上っていくというのは不思議ですね。関東は南に行くこと海なので下がって行くものだと思っていたから方向感覚がおかしくなります。車も買いました。11月に買ったんですが、すぐ次の週に雪が降っちゃって、最初は大変でした。

プロの奏者として自分でもっとも表現して行かなければいけない時期だと思えます。それは僕自身の「心の持ちよう」なんだと思います。金管楽器でコンティンションがちょっと違うと演奏が変わってきちゃったりするのはもちろんあるんですけど、もうまく行くか行かないかの違いは心の持ち方に左右される。だから演奏に対する向き合い方、姿勢をもっと自分の中でしっかり固めていかなければと思っています。その時出てくる音って、ほかの条件がいくら一緒でも、自分のアプローチの仕方や心をどう持っていかでだいぶ変わってくるので、そこをもう少しつかみたい。なかなかつかめませんが。

レパートリーもまだまだ。ブラームスは3番もまだやっていないし、ベートーヴェンもやっていない方が多いです。

♪ ブラームスが好き

5月の札幌くらぶサロンでホルンの説明とミニコンサート

ブラームスは好きですね。どの曲もオーケストラで出たりしますし、ホルンの使い方もすごく上手です。上手といえばワグナーも。一時期はワグナーばかり聴いていました。ホルン吹きがワグナー・チューバという特殊な楽器に持ち替わりますが、彼のホルンの使い方は上手ですね。あと好きなのはなんだかやっぱりベートーヴェンですね。

シューベルトの歌曲にもはまった時期があります。シューベルトつながりでアルペジオ・ネソナタ。よくチェロとかピアノでやる。札幌を聴きにきて下さる人たちってどこがクラシック音楽への入り口だったんだろう。僕は楽器をやっていたからクラシックを聴くのは自然なことだったけれど、そうじゃない方もいっぱいいるわけで、きっかけを聞いてみたいですね。お客さんといういろいろ何か接点を持ってたら面白いですね。具体的にどうしたらいいかというビジョンは見えていないですけど、そもそもオーケストラが何のためにあるのかということを考えます。芸術として音楽をやるとしては、もちろんですが、娯楽としてもっと音楽を楽しむものとしてあるべきなのか、僕の中でもう少しそのビジョンが固まれば、もっといいオーケストラの姿や、オーケストラとのもっといいかわり方が見えてくるんじゃないかなと思っています。

2015年7月9日
担当/井上・村山・中居



新専務理事の永井健さんに 札幌交響楽団の今後を聴く

お客様 札幌交響楽団

新専務理事 永井健さん

(元北海道新聞記者、道新ロジステイクス社長を経て、札幌交響楽団専務理事)

インタビュアー 上田文雄(札幌響くらぶ会長)、武藤義典(事務局局長)、中居志津子(会計担当)

進行 西川吉武(札幌響くらぶ副会長) (文中敬称略)

2015年9月1日キタラ会議室にて収録



札幌交響楽団新専務理事 永井 健

○専務理事ご就任おめでとうございます。私達、札幌響くらぶとの交流を深めたくインタビューを企画しました。

♪ラッパ吹きにあこがれて

(永井) 昭和27年の生まれで、中学生まで滝川で過ごしました。子供のころ、家の前を演習場まで行進していく自衛隊さんの先頭にいたラッパ吹きの姿が「かっこいいな」と印象に残っています。家のラジオからいつもNHKの「朝の名曲」が流れていました。クラシック音楽が好きになったのはそのせいかも。中学校のプラスチックバンドにはトランペットの

空気がなく、ホルンを吹きました。函館ラサール高校時代はプラスチックバンドを創設し、一橋大では管弦楽団。ザーツとホルンでした。笑) 北海道新聞社の面接で、札幌についてどう思うか?と聞かれ、「ペーター・シユバルツさんを辞めさせたのは間違いです!」と勝手な持論を述べました。これがご縁になったのかな? (笑) 転勤族でしたが、東京を含めていつもこのアマオケに参加しました。

♪札幌はどうしても高コスト

(永井) 札幌には、どうしても避けられない二つの課題があります。一つは、本拠地と拠点都市の間を日帰り出来ないこと。楽員や楽器の移動費は大きな負担です。もう一つは、エキストラを首都圏の演奏家に依頼する場合の費用が大きいこと。こんな環境にあるオー

ケストラは全国で札幌だけです。新幹線も無いしね! (笑)。そういう環境の中でも、北海道が世界に誇るこのオーケストラのナマの音をみんなに届けていきたい。道内各地で開催されてきた札幌の定期演奏会は、釧路、稚内と栗山だけになってしまいました。でも、道内各地で年に一度は定期公演を開きたいですね。毎年の東京公演もそうです。今春、島牧の演奏会でもようやく道内179市町村を一巡しましたが、54年もかかりました。まだまだ頑張らないと。

(上田) 道民・市民が身近な環境で札幌を聴けることが大切です。札幌響くらぶの提案を基に2004年から始まったキタラファーストコンサートは、今や札幌だけではなく石狩管内8自治体の小学6年生全員がキタラで札幌の音楽を聴く事業となっています。道にもご理解

いただいた、札幌、旭川、函館、釧路、帯広、北見の6拠点で「札幌ファーストコンサート」を開催し北海道の子ども全員札幌体験ができるようにしたいですね。例えば教育予算を活用するなどして、午前中に子供のための「札幌ファーストコンサート」、午後に野外でグリーンコンサートを開くなんて工夫ができるのでは。かつて各地で開かれてきたグリーンコンサート(注1)が今日の道民や市民に愛される札幌を創った原点。お祭りのな野外のイベントによってオケと聴衆の一体感が創られていくと思います。「ベルリンの風」で知られる野外コンサート(注2)はドイツ人の誇りですね。

(永井) 駆け出し記者だった函館リーコンサートの記事を書きました(笑)。

(上田) 札幌には無限の可能性があると思います。PMFも、札幌とどうコラボレーションしていくか。札幌もホストシティ・オーケストラとしてPMFを活かし切る関係築いてゆかねばと思います。



札幌響くらぶ会長 上田 文雄

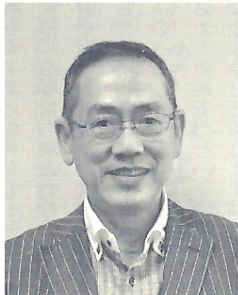
(注1) 夏の風物詩、札幌の野外演奏を楽しむ「グリーンコンサート」が始まったのは1978年、開道110年記念式典の後に道庁赤レンガ庁舎前で開催、2万人が集まって大好評を得た。翌年からは毎年5カ所で

開かれたが、2001年から岩見沢1カ所となっている(札幌50年史から抜粋)

(注2) ドイツのベルリン、ヴェルトビューネの野外音楽堂で、毎年6月の最終日曜日に開かれる。周囲の自然と人が作り上げる「総合芸術」で、コンサートの最後にはパウエル・リンケ作曲の「ベルリンの風」が演奏される(WEBから引用)

♪楽員さんたちと もっと交流したい!

(中居) 札幌響くらぶは、会報に楽員さんのインタビューを連載しています。会員がお話させていただく機会があればそれだけ親しさも増しますよね。楽員さんが街に出る機会が多くなるといい。



西川副会長(右)、中居会計担当(左)



(永井) より多くの人々と楽員が繋がる機会をつくりたい。それにはいろいろな仕組みが必要になりますね。

(上田) ロビーコンサートをチカ・ホで再演するとか! (笑) キタラでの演奏会では、楽員さんの入場で拍手が起き親愛の表現がされます。楽員さんも柔らかな表情で応えてくれている様に見えます。札幌の良き文化かなあ。スタンディングオベーションは長続きしなかったけど! (笑)

(永井) 演奏会後の楽員によるお見送りは定着しています。今、札幌は何をしていくべきなのかいつも考えていきたいし、元新聞記者として道内外の人たちにあらためて札幌を知ってもらうことが大切な仕事だと思っています。本日はありがとうございました。

インタビューを終えて
新専務理事の永井さんにお話を伺って、これからの札幌の在り方やどう支えることが必要なのか? 様々な問題を洗い出しているところだと印象を受けました。札幌と札幌くらぶそれぞれ期待していることや共に進めていきたいことなど今後の課題にしたいと思いました。またインタビューさせてもらいたいと思っております。よろしくお願いたします。(西川)

ヴィオラの演奏には、チーズとワインが合いそう！

去る7月26日、伏見にある奥井理（おくいみかく）ギヤラリーにおいて、札幌ヴィオラ奏者の仁木彩子さんの演奏会を聴いてきました。一言でいうならば、ヴィオラの音色は何のためにもなく心に沁みてきました。まるで人とコミュニケーションを交わしているかのよう！ 自然に入ってきました。

この演奏会のテーマは、世界のフランス6人組の一人と言われたダリウス・ミヨー作曲の「4つの顔」、表情豊かな「顔」がヴィオラに乗って演奏され、はじめて聴く曲なのにすっかりハマってしまいました。つづいて、シヨパンのノクターン、ブラームスのエピソードを話しながらのヴィオラソナタ2番、ジンバリストのサラサーテアーナ（サラサーテあれこれとピアノに後山（うしろやま）美菜子さんを迎え、ヴィオラのもつ多様性や表現力をいかに発揮した演奏は素晴らしくヴィオラの響きに酔いしれたひと時でした。

終了後、仁木彩子さんとお話させてもらい、ウィーン留学のあとは何か変わりました？ とお聴きしたら、なんと今演奏している



仁木さん愛用のヴィオラ



演奏終了後の仁木彩子さん

ドヴォルザークの魅力を満喫！

2015・8・30、奥井理ギヤラリー

「ピアノ三重奏で聴くドヴォルザーク」と題したコンサート。荒木さんと三原さんが出演するので楽しみに出かけた。会場の藻岩の麓にある奥井理ギヤラリーは80人も入れれば一杯になる小さなギヤラリー。絵が壁一面に飾られている温もりのあるホールだ。



熱演する荒木さん（左）、三原さん（右）

プログラムを見ると、ドヴォルザークだけではない。ブラームスとシューマンの曲もある。そして最初の曲はブラームスの「ハンガリー舞曲第6番」、演奏後の荒木さんの説明で、その謎が解けた。シューマンはブラームスを、ブラームスはドヴォルザークを世に出したという繋がりがあり、ブラームスはドヴォルザークのメモ

ディ作りのうまさを絶賛し、羨んだという。こんな人間的なエピソードを聞くと、音楽室の肖像画で見ただけの人が、生身の人間になってドイツやウィーンの街角かなんかで立ち話をしている姿を想像して、何だか嬉しくなりました。シューマンの「幻想小曲集」もよく知っている「ユーモレスク」も最高だったが、圧巻はドヴォルザークのピアノ三重奏曲「ドゥム

（定政）

大森潤子ヴァイオリン・リサイタル

いつもながら内容の濃い充実したコンサートでした。大森さんの魅力とは一体何なのでしょう。伸びのある艶やかな音、卓越したテクニック、豊かな表現力、ステージ上でのチョットした仕種など数え上げたらそれこそ切りがありません。

今回のコンサートで感じたことは、先ずプログラムの配列が実に斬新でした。

モーツアルトのソナタで始まり次にいきなり大曲、フランクのヴァイオリンとピアノのソナタです。メインの曲ですので通常は最後に演奏されます。誰でもご存知の名曲で前半を締めるアイデアに驚きました。結果は大成功。大森さんの説得力ある演奏は聴衆の心を鷲掴みにしました。休憩時間にロビーで皆さんの会話を聴いていると充分領けます。また、この曲はヴァイオリンとピアノが対等に扱われていてピアノは単に伴奏ではなく、互いの主張や会話が感じられます。ピアノの中島由紀さんとの相性も良かったと思います。

後半は如何にもサービスマンな曲目が続く、私たちが飽きさせません。クライスラー・シューベルト・パガニーニ・ヴェニエフスキなどの名曲が続く、最後はラヴェルのツイ

ガーヌの全8曲ですから申し分ありません。アンコールに演奏しても良いような曲が並びました。その中で私が今回初めて耳にした曲は、フバイ作曲の「そよ風」と言う曲です。曲は勿論、作曲者名も全く知りませんでした。解説によればハンガリー生まれのヴァイオリニスト・作曲家です。短い曲ですがヴァイオリンのアルペジオが「そよ風」の曲名にピッタリです。どうしてこのようなすばらしい曲が今まで演奏されなかったのか不思議です。あるいは単に私が知らなかっただけなのかもしれません。最後はアンコールを3曲も演奏して下さる大サービスマン!! 「そよ風」は今回大森さんが出した初めてのCDのタイトルでもあります。CDには当日の演奏曲目が5曲入っていますので断然お勧めです!! 終演後CDを購入された方にロビーでサイン会がありました。当然私も並んだのですが、長蛇の列です。改めて大森人気を認識し、前後の方とお話しましたので、順番が来るまでの35分は長く感じませんでした。至福のひとつを、を過ごすことができました。まさに大森さんは札幌の宝です。

（佐藤高明）

随想 本棚の隅から 13

また秋が来る。この随想はほんの軽い気持ちでヴァーツラフ・ノイマン指揮の札幌特別演奏会のことを書いたのが始まりで、一回だけのつもりだったのに続けることになって、あつという間に三年が過ぎた。そこで初心に戻り、ヴァーツラフ・ノイマン再登場です、と言っても札幌を振りに来る十年も前にチェコフィルを率いて来札しているのです。

一九七四年六月二六日(水)

札幌厚生年金会館

チェコ・フィルハーモニー

管弦楽団 札幌公演

指揮 ヴァーツラフ・ノイマン

スメタナ「わが祖国」より

・モルダウ

・シャルカ

・ホヘミアの牧場と森から

ドヴォルザーク

交響曲 第九番『新世界より』

70年代は一流の楽団が世界中から押し寄せてきた感があった。

「新世界より」を演奏する楽団が多かったのは日本人に受けがいいからなのか？、私はこのチェコ

フィルが一番印象に残っている。音に浸って居るだけで心地よかった。

音のヴェールに全身を包まれて「新世界より」ではなくて「夢世界」漂い

ながら、心の平安と豊かさをしめじみと実感した初夏の宵だった。チェコフィルは一八九六年一月にブラハで第一回演奏会がドヴォルザークの指揮で開かれたそう。曲目はドヴォルザークの『スラブ狂詩曲』『聖者の歌』(初演)序曲「オテロ」交響曲第九番「新世界より」当然といえば当然のプログラムですねー！

74年は戦後初のマイナス成長で高度成長期も峠を越えかけていたころだった。長嶋茂雄が引退した年であり、モナリザが初めて日本に来て東京国立博物館に長蛇の列が出来た。「幸福行き」切符がブームになった。チェコフィルは「幸福行き」を買ってきけた人はささっとこの世を去り、私は今やつと長い旅路の果てに「幸福駅」にたどり着いたのかな。ほとんどに健康で、お酒が飲めて、まだ役に立つことが出来て：

黄昏のとき、グラスを片手にエリシユカさんの「新世界より」を聴きながら「やっぱりビールと音楽は生でなくちゃ」なんて独り言をつぶやく。(井上明子)

北国の新涼に贈る

大平まゆみさんの珠玉のミニアルバム

新涼が肌に心地よい季節になりました。今回、大平まゆみさん(札幌コンサートマスター)が録音された4曲は、チャイコフスキーやラフマニノフなどよく知られた作曲家の作品ですが、私には始めて聴くものばかりで感動の連続でした。チャイコフスキーの「四季」より10月 秋の歌、コロンゴルドの「雪だるま」よりセレナーデなどです。いずれも、大平さんが弾き熱された「グランチーノ」(18世紀の初頭1710年にイタリアマミラノでグランチーノが制作した名器)の

ゆったり漂う音色に魅了される約18分の珠玉のミニアルバムです。4曲とも、最後の部分のヴァイ



出版されたCD=Mayumi Ohira

オリンとピアノ(明上山貴代さん)の音が消えていく部分の余韻の美しさは無類で、北国の初秋から雪が降るまでの穏やかな美しい自然の動きと対話しているように、秋の夜長に心に染み入るものでした。大平まゆみさんとは、昨年12月、札幌駅前地下歩行空間で行われたチカホ クラシックLIVEで、当日の話題であったダッタンシバの

新品種「満天きらり」にちなんで、ボロディン作曲の「ダッタン人の踊り」をヴァイオリンとピアノのために編曲していただいて、それこそ本邦初演を聴かせていただくとともに、大平さんを聞いてお話しさせていただきました。このCDのお求めは、全道のコーチャンフォーにて、定価1000円(税込みです)。(札幌くらぶ会員 川端晋太郎)

スタッフの活動報告(平成27年7月~9月)

●札幌市内中学校吹奏楽部札幌定期演奏会招待事業実施

7月11日(土) 14:00

札幌コンサートホール大ホール

白石、中の島、北辰各中学校併せて142名招待

●会報「札幌くらぶ」第71号発行

7月24日(金) 18:00

札幌コンサートホール大会議室

800部発行し、600部を会員などに発送配布

●第4回札幌くらぶ運営会議開催

7月24日(金) 18:00

札幌コンサートホール大会議室

スタッフ13名出席

●第5回札幌くらぶ運営会議開催

8月24日(金) 18:00

エルブラザ2階18人用会議室

スタッフ15名出席

●永井札幌専務理事インタビュー

9月1日(火) 14:00

札幌コンサートホール中会議室

会報記事作成のため上田会長ほか3名出席

●札幌市内中学校吹奏楽部札幌定期演奏会招待事業実施

9月5日(土) 14:00

札幌コンサートホール大ホール

北菜、藻岩各中学校併せて63名招待

●第11回札幌くらぶサロン開催

9月12日(土) 17:30

ノースエイム4階会議室

会員他36名参加、札幌定期解説、野津フルト副首席奏者のミニコンサート、交流会開催

●第6回札幌くらぶ運営会議開催

7月28日(金) 18:00

札幌コンサートホール大会議室

スタッフ12名出席

編集後記

◆コンサートの余韻と拍手。ボンマーさんが手を下げたままの余裕が欲しいな！尾高さんの時より早い気がしてならない(私だけ)。エリシユカさんの時と同じ位の余韻が欲しいものです。(神)

◆秋ですね。秋と言えはなぜかブラームスを聴きたくなりませう。晩年の作品、特にクラリネット五重奏曲短調。人生の秋を思わせるしんみりとした曲です。ただ憂鬱なときは避けた方が良くもありません。(ありた)

◆ワグナーに愛されながら「消された」楽器の秘密の見出しに惹かれてヴィオラ奏者が書いた幻の楽器「ヴィオラ・アルタ物語」を読んだ。私の好きな弦楽器には秘密を持つものが多い。クラシックを聴きながらそれぞれの楽器の秘密を思い巡らすのも楽しい。(横山章子)

◆会報のネット印刷を検討しているけれど、今の方法ではいろいろの問題が出てきて、なかなか移行しがたい状況になってきている。もう少し研究が必要のようだ。(武藤)